

いまこそ教育の改革を

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

日本の公教育がおかしい。それは、もう何年も前から言われてきたことです。もちろん、行政や学校もあれこれと対策を立ててはきたようです。しかし、その結果がどのように実を挙げ得ているのかいいのかわからない、学校に通う子どもを持つ親たちにも、なかなか実態は把握できていないようです。

子どもは学校のことを話そうとはしませんし、親は子どもが学校へ行っているというだけで安心していて、その現状について深く追究しようとはいたしません。また、学校側は批判を恐れて、問題を提起するどころか、事実を隠そうとさえいたします。

そんななかで昨年の暮れ、某誌に「ある女生徒からの忘れえぬ手紙」という一文が寄せられました。九州の高校から東京近郊のK県の「市内では一番レベルが高いといわれている県立の高校」に転校した女生徒が、かつての先生に送った手紙です。手紙を貰もらった先生は、「日本の公教育はこのままで本当にいいのかわからない。できればこの手紙の内容を多くの人に知ってもらい、教育正常化への問題意識を持ってほしい」と思ったということです。その内容の一部を抜粋して引用させていただきます。

——学校へ行ってまず驚いたのは、教室の中でした。ジャンプみたいなマンガが山積みしてあって、

壁には芸能人のポスターがはりまくっています。校則がなくて（中略）ピアス、茶パツは当たり前で、茶パツを通り越してキンパツの人とかもいて、男子もそんな感じだからびっくりしちゃいました。

—— 遅刻しても先生たちは何も言わない。（中略）授業中もしゃべりまくっている人、ずーっと寝ている人、鏡を見ながら化粧している人、飲み食いしている人、手紙書いてる人、などなど授業を聞いている人はほとんどいません。（中略）授業中でもどっか行っちゃう人とか、途中で帰って来る人とかいて、廊下で一時間ずつと友だちとしゃべっている人もいます。校門の外へ出ていくのも自由なんです。

先生たちもちゃんと教えてなくて、教え方がすごく下手。（中略）うちの学校の先生は工事現場のおじさんみたいな格好で、数学の先生なんか首タオルで、うちわであおぎながら授業しています。

これが一流の県立高校の姿なのです。日本の学校はなぜここまで凋落ちようらくしてしまったのでしょうか。

かつてのテレビの人気ドラマ『おしん』では、主人公が子守をしながら校庭たなずに佇んで、学校への思いを募つらす場面がありました。貧しかった時代には、学校は希望に続く憧れの場所だったのです。

高度成長と共に進学率も急速に上がりました。おしんのように貧しさ故に学校に行けないということもなくなりしました。学歴主義や受験加熱という負の側面はありましたが、それでも二十年ほど前には、ハーバード大学のエズラ・F・ヴォーゲル教授が、その著書『ジャパンアズナンバーワン』で、日本の繁栄の要因として、「集団への忠誠心」や「犯罪の少なさ」と共に「義務教育の成功」を挙げていました。事実、学力オリンピックでは日本の子どもたちは常に世界のトップレベルにいましたし、荒れる教室に悩むアメリカは日本の初等中等教育に学ぼうという方針を打ち出したほどでした。

しかし皮肉なことに、すでに日本の学校も同じ病に冒され始めていたのです。バブル経済、そして崩壊。教育の凋落は、そうした不健全な社会と無関係ではありません。むしろそこにこそ問題の根幹があ

ると思います。正しい価値観を見失った社会で、子どもだけが健全であることはありえないからです。では、どうすればよいのか。教育内容や授業時間などのあれこれをいじってみても改善されることはないでしょう。なぜなら、問題の根幹は「人倫」の喪失にあるからです。教える者と学ぶ者が共に「より善く生きたい」と思い、そのために教えたい、学びたいと望まぬかぎり教育は成立しないからです。しかし先の手紙を読むかぎり、先生も生徒も、その行動は人倫から外れています。そして、ヴォーゲル教授が挙げた経済大国日本を支えていた三つの条件のいずれもが、人倫を根幹として成り立つものだと気づきます。つまり、こうした教育の荒廃は、そのまま社会の荒廃の反映であり、日本社会の衰退と崩壊を予感させる事態です。

これまで教育改革といえば、長文の方針が示されました。しかし、この弛緩しかんしきって、人倫の何たるかを忘れた教育現場に、長文の理屈がどう役立つというのでしょうか。文部科学省は「ゆとりの教育」を打ち出して、自由で創造的な授業の理想を説きますが、自由であればあるほど教師や生徒の資質が問われます。先の高校のように、ますますタガが外れるだけではないでしょうか。もっと具体的な目標、人間としての基本の基本から出発しなければ何一つ立て直すことができないのではないかと思うのです。わが会は、「人づくり」については五十五年の実績を有し、会友一丸となって人倫に基づく社会の実現に努めてきました。しかしその活動の根幹は、ただ五か条の実践にあるだけです。そこに発して、ありとあらゆる人生の問題に対処して、万人の仕合わせに向かって歩を進めてきたのです。

まして、先ほどの手紙に見るような、人倫の枠の外にある者に対しては、「朝の誓」以前の、もっと単純明快な実践目標が用意されなければならないと思います。その目標とはただ三か条です。

すなわち、「時間とルールを守る」「挨拶をする」「人倫に外れる自由はないと知る」の三か条です。

集団生活の場では、人倫に基づくルールがなければなりません。学校も同じです。教師も生徒も、授業の開始時間と終了時間を守る。授業中は、私語を慎み、勝手な行動をしない。これだけは授業成立の最低不可欠の条件です。

人と人が出会ったときに、声を掛け合う。これも社会生活の最低限度の礼儀です。それをしないということは、人とのコミュニケーションを拒否することで、社会生活をしないという意味表明です。

そして、人は人である限り、人間として守るべき倫理から自由ではありません。何人にも人倫を冒す「権利」も「自由」もないのです。人に迷惑をかけること、人を不当に侮辱すること、人倫に外れた行為をしかけることは無条件に許されないのです。

この三つの掟を遵守させることに對してまでも、管理教育反対、校則反対だと言うのならば、それは人倫反対、社会生活反対というのと同じです。社会は崩壊してもよいというのと同じです。

では、誰がその基本の基本を築くのか。首タオルをして、生徒を叱るところか注意一つできない先生に、それを委ねることは不可能です。

責任の所在は、子どもの教育を学校だけに押しつけてきた家庭や地域、人倫を踏みにじるさまを見せつけてきた社会にもあるのです。私は、教育に危機感を持つすべての人々に期待したいと思います。

皆さんはご家庭で起床や約束の時間を守っていますか。家族内できちんと挨拶を交わし合っているでしょうか。子どもの自分勝手な言動や乱れた服装などを放置してはいないでしょうか。

この一つにでも思い当たることがあるとすれば、あなたもまた学校の崩壊に加担しているのです。まず、自分の家庭に愛和した倫理的な環境を整えること。人倫を核として生きなければならぬということとを子どもに身をもって示すこと。教育改革とは、まさしくそこから始まるのだと思います。